

形容詞と前置詞格目的語の基本語順について

人 見 明 宏

0. 序

ドイツ語の形容詞には、補足成分として目的語を支配するものがある。以下の例において、(1)の形容詞 *sicher* は2格目的語として *deines Erfolgs* を、(2)の *ähnlich* は3格目的語として *seinem Vater* を、(3)の *los* は4格目的語として *den Schnupfen* を支配している。

- (1) Er ist *deines Erfolgs* **sicher**.
- (2) Er ist *seinem Vater* **ähnlich**.
- (3) Er ist endlich *den Schnupfen* **los**.

このような、前置詞を伴わない純粹格（自立格；reiner Kasus）目的語を補足成分とする形容詞が、seinなどのコブラ動詞と共起する場合は、上記の例文のように、[純粹格目的語—形容詞]の語順しか認められない（Helbig / Buscha (2001) S. 487）。

一方、ドイツ語の形容詞には、前置詞格目的語を補足成分として支配するものもある。以下の例(4)では形容詞 *zufrieden* が *mit seinem Auto* を、(5)では *stolz* が *auf seinen Sohn* を前置詞格目的語として支配している。

- (4) Er ist *mit seinem Auto* **zufrieden**.
- (5) Er ist **stolz** *auf seinen Sohn*.

このような、前置詞格目的語を補足成分とする形容詞が述語内容語として用いられた場合、(4)のように、[前置詞格目的語—形容詞]という語順も、(5)のように、[形容詞—前置詞格目的語]という語順も可能である（ebd. S. 488）。

形容詞とその目的語の語順に関して、上記の点をまとめたのが、以下の

表である。

目的語の種類	語 順
純粹格目的語	[純粹格目的語—形容詞]
前置詞格目的語	[前置詞格目的語—形容詞] [形容詞—前置詞格目的語]

ここで問題となるのが、形容詞とその前置詞格目的語の場合のみ、2つの語順が可能であるという点である。本論文では、この2つの語順に関して、まずドイツ語の主文と副文の動詞の位置を考察することによって、本来、1つの基本語順が存在し、この基本語順から、(基本語順とは異なる)もう1つの語順が派生したと考えるのが妥当であることを示す。次に、前置詞格目的語を支配する主な形容詞を挙げ、独独辞書に記載されている用例における語順を考察し、形容詞とその前置詞格目的語の基本語順を明らかにする。さらに、この基本語順の妥当性についても、形容詞と純粹格目的語の語順、語間の統語関係上の密接度および枠構造との関連から論じる。

1. 基本語順

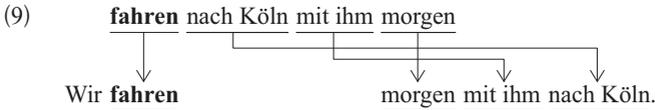
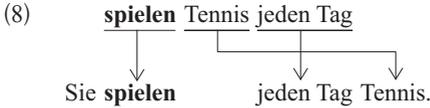
ドイツ語では、例文(6)のように、主文において定動詞(*spielen*)は第2位(決定疑問文では第1位)を占める。これに対し、(7)のように、副文ではその文末に定動詞は位置する。

- (6) Sie **spielen** jeden Tag Tennis.
 (7) Ich weiß, dass sie jeden Tag Tennis **spielen**.

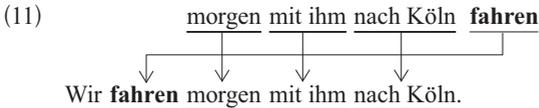
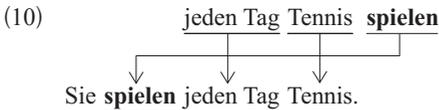
このように、一見、ドイツ語の定動詞の位置に関しては、2つの語順が存在するように見えるが、不定詞句の語順を基本とすると、事情は異なる。

以下の(8)および(9)は英語と同じ主要部先行型の語順の不定詞句から主文を作った例である。主要部である不定詞 *spielen* および *fahren* が不定詞句の最左端を占め、その直後に動詞と統語的に最も密接な関係にある要素、すなわち動詞 *spielen* の補足成分である4格目的語 *Tennis*、*fahren* の補足成分である場所(方向)の副詞的規定語 *nach Köln* が現れる。それより右方に位置するのが、動詞との統語的關係がより密接でない要素(添加成

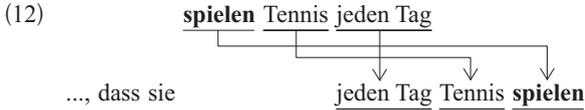
分の jeden Tag, mit ihm および morgen) である。この主要部先行型の不定詞句から主文を作る場合、動詞の移動は起こらないが、他の要素、すなわち目的語 (Tennis) および副詞的規定語 (jeden Tag, nach Köln, mit ihm, morgen) に関しては、複雑な移動が生じる。



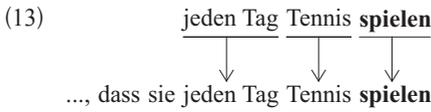
一方、(10) および (11) は日本語と同じ主要部後続型の語順の不定詞句から主文を作った例である。主要部である不定詞は不定詞句の最右端を占め、その直前に動詞と統語的に最も密接な関係にある要素が、それよりさらに左方に動詞との統語的關係がより密接でない要素が生起する。この主要部後続型の不定詞句から主文を作る場合、動詞の移動のみが生じ、他の要素の移動は起こらない。また、動詞の移動に関しても、最右端の要素を第2に移動するという簡潔にして一貫した規則を当てはめるのみでよい。



次に、副文における語順について考察する。以下の (12) は主要部先行型の語順の不定詞句から副文を作った例である。この場合、主文 (8) のときと同様に、4 格目的語の右方への移動が生じるのみならず、さらに動詞も副文の最右端に移動させなくてはならない。



これに対して、(13)は主要部後続型の語順の不定詞句から副文を作った例である。この場合、動詞、4格目的語、副詞的規定語のどの要素も移動させる必要がない。



上記のように、主要部後続型の不定詞句から平叙文の主文を作るときは「最右端の動詞を第2位に移動させる」、副文を作るときは「要素の移動は生じない」という規則を適用するのみである。この規則は、主要部先行型の不定詞句から主文および副文を作るときよりも、より一貫性があり、かつ簡潔である。それゆえ、ドイツ語の定動詞の位置に関して、その基本語順は主要部後続型の不定詞句の語順であると言える。そして、主文および副文の2つの語順は、この基本語順の不定詞句から作られた実現形であると考えられる。

2. 前置詞格目的語を支配する形容詞

以下では、まず、独辞書に記載されている前置詞格目的語を支配する形容詞の用例のうち、本論文で考察の対象とするものを挙げる。次に、それらの用例における形容詞と前置詞格目的語の語順について考察する。

2.1. 前置詞格目的語を支配する形容詞

本論文では、以下に挙げた前置詞格目的語を支配する形容詞を考察の対象とする (Dudenband 4.—Die Grammatik (1984) S. 626 f、Helbig / Buscha (2001) S. 288 ff、浜崎 / 橋本 (2004) S. 164 ff.)。その際〈 〉内に前置詞とそれが支配する格も記載する。

abhängig 〈von + Dat.〉	frei 〈von + Dat.〉
angewiesen 〈auf + Akk.〉	froh 〈über + Akk.〉
ärgerlich 〈auf + Akk. / über + Akk.〉 ¹⁾	glücklich 〈über + Akk.〉
arm 〈an + Dat.〉	hungrig 〈nach + Dat.〉
aufmerksam 〈auf + Akk.〉	interessiert 〈an + Dat.〉
begierig 〈auf + Akk. / nach + Dat.〉	neidisch 〈auf + Akk.〉
beihilflich 〈bei + Dat.〉 ²⁾	neugierig 〈auf + Akk.〉
beliebt 〈bei + Dat.〉	reich 〈an + Dat.〉
böse 〈auf + Akk. / mit + Dat. / über + Akk.〉	scharf 〈auf + Akk.〉
dankbar 〈für + Akk.〉 ³⁾	schuld 〈an + Dat.〉
durstig 〈nach + Dat.〉	stolz 〈auf + Akk.〉
eifersüchtig 〈auf + Akk.〉	traurig 〈über + Akk.〉
einverstanden 〈mit + Dat.〉	verantwortlich 〈für + Akk.〉
empfindlich 〈gegen + Akk.〉	verliebt 〈in + Akk.〉
erstaunt 〈über + Akk.〉	zufrieden 〈mit + Dat.〉
fähig 〈zu + Dat.〉	zuständig 〈für + Akk.〉
fertig 〈mit + Dat.〉	

2.2. 用例における形容詞とその前置詞格目的語の語順

次に、2.1で挙げた形容詞のうち、用例の多いもの、複数の統語機能で用いられているものなどをいくつかを取り上げ、形容詞とその前置詞格目的語に関して、独独辞書に記載されている用例における語順を考察する。今回使用した独独辞書は、Der kleine Wahrig. Wörterbuch der deutschen Sprache (2007) (以下、Wahrig)、Duden. Deutsch als Fremdsprache Standardwörterbuch (2010) (以下、Standardwörterbuch)、Dudenband 2.—Das Stilwörterbuch (2010) (以下、Stilwörterbuch)、Langenscheidt. Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache (2010) (以下、Langenscheidt) の4冊である⁴⁾。

2.2.1. abhängig 〈von + Dat.〉

abhängig 〈von + Dat.〉の用例は全36例あり、そのうち abhängig が述語内容語である例は29例 (主語の述語内容語：24例、目的語の述語内容語：5例)、付加語である例は4例、その他3例である。

まず、主語の述語内容語としての用例では、24例すべてが [前置詞格

目的語—形容詞]の語順である。以下のように、前置詞句内の名詞句は、名詞のみ、冠詞類と名詞、付加語を伴ったかなり長い名詞句などである。

- (14) *von Drogen* **abhängig** sein (Stilwörterbuch S. 32, S. 249)
- (15) Die Wahl ist *vom Preis* **abhängig**. (ebd. S. 31)
- (16) Er ist finanziell *von den Eltern* **abhängig**. (Standardwörterbuch S. 52)
- (17) Das Kindergeld ist nicht *von der Höhe des Einkommens der Eltern* **abhängig**. (Stilwörterbuch S. 31)

次に、目的語の述語内容語としての用例でも、5例すべてが[前置詞格目的語—形容詞]の語順である。以下のように、前置詞句内の名詞句も、冠詞類と名詞のみや付加語を伴ったかなり長い名詞句もある。また副文を先取りする相関詞である前置詞と代名詞の融合形 *davon* が用いられているものもある。

- (18) Sie machte ihre Zustimmung *von einer Entscheidung ihres Freundes* **abhängig**. (Standardwörterbuch S. 52)
- (19) Sie haben ihr Kommen *vom Wetter* **abhängig** gemacht.
(Stilwörterbuch S. 31)
- (20) Sie macht ihre Zustimmung *davon* **abhängig**, wie sich der Bewerber im Gespräch verhält. (ebd. S. 31)

付加語としての用例でも、4例すべてが[前置詞格目的語—形容詞]の語順である。この4例の場合、以下のように、前置詞句内の名詞句は、比較的短いものである。

- (21) ein *vom Alkohol* völlig **abhängiger** Mensch (ebd. S. 32)
- (22) *vom Export* **abhängige** Firmen (ebd. S. 31 f.)
- (23) die *vom Zufall* **abhängige** Entwicklung (ebd. S. 31)

なお、用例で動詞が用いられておらず、*abhängig*の統語機能が不明なもの3例あるが、すべて[前置詞格目的語—形容詞]の語順である。

(24) *vom Wetter abhängig* (Langenscheidt S. 54)

(25) *vom Zufall abhängig* (ebd.)

以上、*abhängig* 〈von + Dat.〉の全36用例のうち、[前置詞格目的語—形容詞]の語順が36例であり、[形容詞—前置詞格目的語]の語順は0例である。

2.2.2. böse 〈auf + Akk. / mit + Dat. / über + Akk.〉

böse (または *bös*) は前置詞格目的語として、*auf + Akk.*、*mit + Dat.* または *über + Akk.* を支配する。*böse* の用例は全6例であり、そのすべてが主語の述語内容語として用いられている。また以下のように、*böse* が支配する前置詞が異なっても、語順はすべて [形容詞—前置詞格目的語] である。

(26) Er ist **böse** *auf mich*. (Stilwörterbuch S. 11)

(27) Ich bin **böse** *mit ihm*. (Wahrig S. 857)

(28) Sie war **böse** *über sein langes Fortbleiben*. (Stilwörterbuch S. 212)

2.2.3. fertig 〈mit + Dat.〉

fertig 〈mit + Dat.〉の用例は全53例あり、そのすべてにおいて *fertig* は主語の述語内容語である。

語順に関しては、[前置詞格目的語—形容詞]と[形容詞—前置詞格目的語]の両者が混在しているが、[前置詞格目的語—形容詞]が48例であり、大多数を占めている。以下のように、前置詞句内の名詞句は、冠詞類と名詞、付加語を伴った比較的長い名詞句、人称代名詞および前置詞と代名詞の融合形など、さまざまである。

(29) Er ist *mit seiner Arbeit* fast **fertig**. (Standardwörterbuch S. 367)

(30) Das Waschmittel wird auch *mit hartnäckigem Schmutz* **fertig**.

(Stilwörterbuch S. 757)

(31) Ich bin *mit ihr* **fertig**. (Wahrig S. 348)

(32) Er war eins, zwei, drei *damit* **fertig**. (Stilwörterbuch S. 277)

一方、[形容詞—前置詞格目的語] は5例であり、そのうちの2例を下に挙げる。(33)のように、(29)と同じ名詞 (*Arbeit*) が用いられているにもかかわらず、(33)と(29)で語順が異なるものもある。

(33) Sie waren rasch **fertig mit der Arbeit**. (Standardwörterbuch S. 744)

(34) Sie ist immer schnell **fertig mit allem**. (Wahrig S. 830)

2.2.4. frei (von + Dat.)

frei (von + Dat.) の用例は全47例あり、そのうち *frei* が述語内容語である例は23例 (主語の述語内容語: 18例、目的語の述語内容語: 5例)、その他が24例である。

まず、主語の述語内容語としての用例では、18例すべてが [形容詞—前置詞格目的語] の語順である。以下のように、前置詞句内の名詞句は、名詞のみのもの、付加語を伴ったかなり長い名詞句などである。

(35) Er ist nicht **frei von Schuld**. (Standardwörterbuch S. 1057)

(36) Die Arbeit ist **frei von Fehlern**. (Stilwörterbuch S. 331)

(37) Das Brot ist **frei von Konservierungsmitteln**. (Langenscheidt S. 424)

(38) Die Düngemittel sind **frei von schädlichen Bestandteilen**.

(Stilwörterbuch S. 353)

次に、目的語の述語内容語としての用例では、2つの語順が混在している。以下のように、動詞に *machen* が用いられた2例では [前置詞格目的語—形容詞] である。

(39) Du musst dich *von deinen Vorurteilen* **frei** machen.

(Stilwörterbuch S. 353)

(40) Sie müssen sich *von dieser Vorstellung* **frei** machen!

(Langenscheidt S. 424)

これに対し、*fühlen* が用いられた3例では [形容詞—前置詞格目的語] の語順である。

(41) sich **frei von Schuld** fühlen (Wahrig S. 839, Stilwörterbuch S. 768)

(42) Sie fühlt sich **frei von jeder Schuld**. (Standardwörterbuch S. 831)

なお、用例で動詞が用いられておらず、**frei** の統語機能が不明なものが24例あるが、すべて [形容詞—前置詞格目的語] の語順である。

(43) **frei von Fieber** (Wahrig S. 372)

(44) **frei von aller Sorgen** (Standardwörterbuch S. 393)

以上、**frei** 〈von + Dat.〉 の全47用例のうち、[前置詞格目的語—形容詞] の語順が2例であり、[形容詞—前置詞格目的語] の語順は45例である。

2.2.5. reich 〈an + Dat.〉

reich 〈an + Dat.〉 の用例は全23例あり、そのうち **reich** が述語内容語である例は16例で、そのすべてが主語の述語内容語であり、付加語である例は3例、その他が4例である。

まず、主語の述語内容語としての用例では、16例すべてが [形容詞—前置詞格目的語] の語順である。以下のように、前置詞句内の名詞句は、名詞のみであるが、短い名詞から長い名詞までである。

(45) Diese Grube ist **reich an Erz**. (Standardwörterbuch S. 459)

(46) Fisch ist **reich an Eiweiß**. (Langenscheidt S. 408)

(47) Das Land ist **reich an Bodenschätzen**. (Wahrig S. 763)

(48) Kartoffeln sind **reich an Kohlenhydraten**. (Langenscheidt S. 647)

次に、付加語としての用例では、3例すべてが [前置詞格目的語—形容詞] の語順である。以下のように、前置詞句内の名詞句は、名詞のみのも、付加語を伴ったものもある。

(49) ein **an Rohstoffen reiches** Land (ebd. S. 915)

(50) eine **an literarischen Werken reiche** Epoche (Stilwörterbuch S. 697)

なお、用例で動詞が用いられておらず、**reich** の統語機能が不明なもの

が4例あるが、そのうち〔前置詞格目的語—形容詞〕の語順と〔形容詞—前置詞格目的語〕の語順が各2例である。

以上、*reich* 〈an + Dat.〉の全23用例のうち、〔前置詞格目的語—形容詞〕の語順が5例であり、〔形容詞—前置詞格目的語〕の語順は18例である。

2.2.6. *stolz* 〈auf + Akk.〉

stolz 〈auf + Akk.〉の用例は全18例あり、そのすべてにおいて *stolz* は主語の述語内容語であり、以下のように、語順も〔形容詞—前置詞格目的語〕である。

(51) Er ist sehr **stolz auf seinen Sohn**. (Wahrig S. 907)

(52) Er ist ganz **stolz auf das Foto der Diva mit persönlicher Widmung**.

(Standardwörterbuch S. 1093)

(53) Er war sehr **stolz darauf**, dass er die Prüfung bestanden hatte.

(Langenscheidt S. 1055)

なお、人見(2010)では、WELT ONLINE (<http://www.welt.de/>) および ZEIT ONLINE (<http://www.zeit.de/index>) に2009年1月1日から9月30日の間に掲載された記事から主語の述語内容語の実例を集め、分析したが、その結果、全494例中、〔形容詞—前置詞格目的語〕の語順は453例(91.7%)であり、本論文で考察の対象としている用例の場合とかなり近い結果であると言える。

2.2.7. *verantwortlich* 〈für + Akk.〉

verantwortlich 〈für + Akk.〉の用例は全22例あり、そのうち *verantwortlich* が述語内容語である例は18例(主語の述語内容語: 14例、目的語の述語内容語: 4例)、付加語である例は2例、その他が2例である。

まず、主語の述語内容語としての用例では、13例が〔前置詞格目的語—形容詞〕の語順である。以下のように、前置詞句内の名詞句は、冠詞類と名詞、付加語を伴ったかなり長い名詞句および前置詞と代名詞の融合形など、さまざまである。

- (54) Die Eltern sind *für ihre Kinder* **verantwortlich**.
(Standardwörterbuch S. 1008)
- (55) *für die Organisation eines Festes* **verantwortlich** sein
(Langenscheidt S. 823)
- (56) Sie ist *dafür* **verantwortlich**, dass die Termine eingehalten werden.
(Standardwörterbuch S. 1008)

一方、主語の述語内容語で [形容詞—前置詞格目的語] の語順は、以下の 1 例のみである。

- (57) Er ist voll **verantwortlich für seine Tat**. (Wahrig S. 997)

目的語の述語内容語としての用例では、4 例すべてが [前置詞格目的語—形容詞] の語順である。動詞は、以下のように、*fühlen* および *machen* である。

- (58) Ich fühle mich *dafür* **verantwortlich**. (Standardwörterbuch S. 1008)
- (59) Er machte das schlechte Wetter *für den Unfall* **verantwortlich**.
(Stilwörterbuch S. 927)

付加語としての用例は、以下のように、2 例とも [前置詞格目的語—形容詞] の語順である。

- (60) *der für den Einkauf* **verantwortliche** Mitarbeiter
(Standardwörterbuch S. 1008、Stilwörterbuch S. 927)

最後に、その他として、*verantwortlich* が主語の述語内容語的付加語として用いられている用例が 2 例ある。2 例とも、以下のように、動詞は *zeichnen* であるが、語順は (61) が [前置詞格目的語—形容詞]、(62) が [形容詞—前置詞格目的語] である。

- (61) Wer zeichnet *für diese Sendung* **verantwortlich**? (ebd. S. 1051)

(62) Sie zeichnet **verantwortlich für das Manuskript der Sendung.**

(ebd. S. 927)

以上、verantwortlich 〈für + Akk.〉の全22用例のうち、[前置詞格目的語—形容詞]の語順が20例であり、[形容詞—前置詞格目的語]の語順は2例である。

2.2.8. zufrieden 〈mit + Dat.〉

zufrieden 〈mit + Dat.〉の用例は全25例あり、そのすべてにおいてzufriedenは主語の述語内容語であり、以下のように、語順も[前置詞格目的語—形容詞]である。

(63) Er ist *mit seiner Arbeit* nicht **zufrieden.** (Langenscheidt S. 756)

(64) Der Schüler ist *mit der Bewertung seines Aufsatzes* nicht **zufrieden.**

(ebd. S. 221)

(65) Er ist sehr *mit sich selbst* **zufrieden.** (Wahrig S. 656)

(66) Er ist *mit nichts* **zufrieden.** (Standardwörterbuch S. 679)

なおzufrieden 〈mit + Dat.〉に関しても、人見(2010)では、全630例中、[前置詞格目的語—形容詞]の語順は450例(71.4%)という結果が得られており、[前置詞格目的語—形容詞]の語順になる傾向が高いと言える。

2.3. 用例における語順のまとめ

本論文で考察の対象とした形容詞のうち、2.2で取り上げなかった形容詞も含め、形容詞と前置詞格目的語の語順についてまとめたものが以下の表である⁵⁾。

形容詞と前置詞格目的語の基本語順について

	[前目一形]					[形一前目]					合計
	主述	目述	付	他	%	主述	目述	付	他	%	
abhängig 〈von〉	24	5	4	3	100.0					0.0	36
angewiesen 〈auf〉	31				100.0					0.0	31
ärgerlich 〈auf/ über〉	3				37.5	5				62.5	8
arm 〈an〉			3		23.1	7		3		76.9	13
aufmerksam 〈auf〉	2	9			100.0					0.0	11
begierig 〈auf/ nach〉	1				33.3	2				66.7	3
beihilflich 〈bei〉	8		1		100.0					0.0	9
beliebt 〈bei〉	9	2	1	1	92.9	1				7.1	14
böse 〈auf/ mit/ über〉					0.0	6				100.0	6
dankbar 〈für〉	3				37.5	5				62.5	8
durstig 〈nach〉					0.0	2				100.0	2
eifersüchtig 〈auf〉					0.0	5				100.0	5
einverstanden 〈mit〉	18				100.0					0.0	18
empfindlich 〈gegen〉	1				11.1	8				88.9	9
erstaunt 〈über〉	2				66.7	1				33.3	3
fähig 〈zu〉	12				100.0					0.0	12
fertig 〈mit〉	48				90.6	5				9.4	53
frei 〈von〉		2			4.3	18	3	24		95.7	47
froh 〈über〉	2				33.3	4				66.7	6
glücklich 〈über〉	1				20.0	4				80.0	5
hungrig 〈nach〉					0.0	6		3		100.0	9
interessiert 〈an〉	10				100.0					0.0	10
neidisch 〈auf〉					0.0	5				100.0	5
neugierig 〈auf〉	1				25.0	3				75.0	4
reich 〈an〉			3	2	21.7	16		2		78.3	23
scharf 〈auf〉					0.0	8				100.0	8
schuld 〈an〉	8				40.0	12				60.0	20
stolz 〈auf〉					0.0	18				100.0	18
traurig 〈über〉					0.0	3				100.0	3
verantwortlich 〈für〉	13	4	2	1	90.9	1		1		9.1	22
verliebt 〈in〉	11				100.0					0.0	11
zufrieden 〈mit〉	25				100.0					0.0	25
zuständig 〈für〉	8		2		100.0					0.0	10
合計	241	22	16	7	61.2	145	3	0	33	38.8	467

3. 形容詞と前置詞格目的語の基本語順

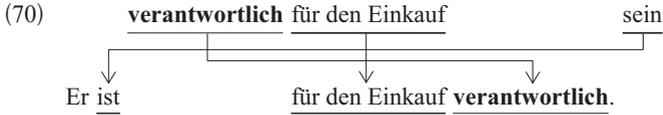
以下では、まず、形容詞と前置詞格目的語に関して、[形容詞—前置詞格目的語]と[前置詞格目的語—形容詞]のどちらがその基本語順であるのかを明らかにする。そして、その基本語順が、語順に関する他の規則・要因などと矛盾せず、妥当なものであることを考察する。

3.1. 基本語順に関する考察

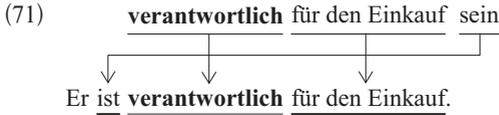
前置詞格目的語を支配する形容詞が格語尾を伴い、名詞の付加語として用いられている場合は、2.3の表にもあるように、[前置詞格目的語—形容詞]の語順のみが認められる。これに対して、述語内容語として用いられている場合は、[前置詞格目的語—形容詞]と[形容詞—前置詞格目的語]の両方の語順が可能である。したがって、述語内容語として用いられた形容詞とその前置詞格目的語の語順に関しては、一方が基本語順であり、他方は基本語順から作られた実現形であると考え。そこで、2.1で挙げた形容詞で、その用例において述語内容語として用いられた場合に2つの語順で実際に生起しており、かつ付加語としても用いられている *verantwortlich* を用いた以下の(67)~(69)を例に、基本語順について考察する。

- (67) Er ist für den Einkauf **verantwortlich**.
- (68) Er ist **verantwortlich** für den Einkauf.
- (69) der für den Einkauf **verantwortliche** Mitarbeiter

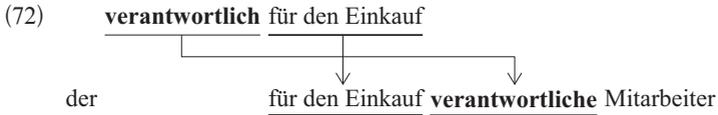
上記の(67)~(69)を[形容詞—前置詞格目的語]の語順から作ったものが、以下の(70)~(72)である。(70)では、不定詞句の最右端に位置する動詞を第2位に、また前置詞句の前に位置する形容詞を前置詞句の後ろに移動することで、文が形成される。この場合、2つの要素の移動が必要となり、かつその移動が左方(動詞)と右方(形容詞)という異なる方向であることがわかる。



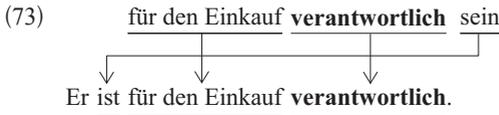
(71) では、不定詞句の最右端に位置する動詞を第 2 位に移動するだけで、形容詞や前置詞句の移動は生じない。



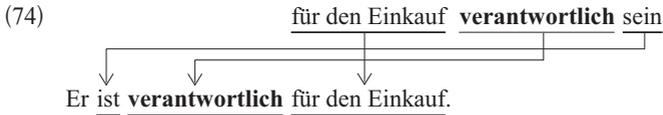
(72) では、(70) と同じく、前置詞句の前に位置する形容詞を前置詞句の後ろに移動する必要がある。



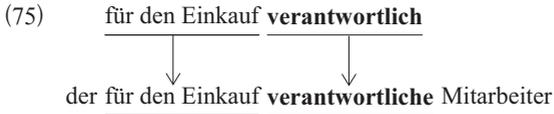
次に、[前置詞格目的語—形容詞] の語順から、(67)~(69) を作る場合の各要素の移動を観察する。(73) では、不定詞句の最右端に位置する動詞を第 2 位に移動するだけで文が形成され、形容詞や前置詞句の移動は生じない。



(74) では、不定詞句の最右端に位置する動詞を第 2 位に、さらにその直前に位置する形容詞を前置詞句の前に移動する必要がある。この場合、(70) と同様に、2 つの要素の移動が必要となるが、(70) とは異なり、その移動は一方向（左方のみ）でよい。



(75) では、前置詞句、形容詞のいずれも移動する必要がない。

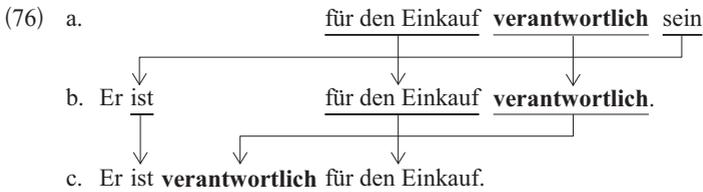


以上から、形容詞の移動に関してまとめたのが、次の表である。

	[形容詞—前置詞格目的語]	[前置詞格目的語—形容詞]
(67)	(70) : 右方 (前置詞句の後ろ)	(73) : —
(68)	(71) : —	(74) : 左方 (前置詞句の前)
(69)	(72) : 右方 (前置詞句の後ろ)	(75) : —

ここからわかるのは、[形容詞—前置詞格目的語] の語順よりも、[前置詞格目的語—形容詞] の語順からのほうが、移動を伴うケースが少なく、またその移動の方向も動詞の場合と同じ左方のみであるということである。この点から、形容詞と前置詞格目的語の基本語順は、[前置詞格目的語—形容詞] である可能性が高いと言える。

[前置詞格目的語—形容詞] を基本語順とした場合、この基本語順から (68) を作るときのみ形容詞の移動が生じる (74) について再考する。まず (74) に中間段階を設定する。この中間段階が、以下の (76) の b である。



(74) は、実際には、まず (76) の a から b (= (67)) が作られ、この段階では [前置詞格目的語—形容詞] という基本語順のままである。文 b も実際

詞] が基本語順であると言える。

次に、一般に統語的に密接な関係にある要素は隣接して生起する。たとえば、動詞の補足成分と添加成分に関しては、動詞と統語的に密接な関係にあるのは補足成分である。そのため、補足成分と添加成分が生起した文では、不定詞句において最右端の動詞に隣接する位置、すなわち動詞の直前を占めるのが補足成分であり、添加成分は補足成分よりさらに左方に生起する。以下の不定詞句の例(78)では、*in dieser Stadt* (場所の副詞的規定語) が動詞 *wohnen* の補足成分であり、*seit drei Jahren* (時の副詞的規定語) が添加成分であるため、*seit drei Jahren—in dieser Stadt* という語順になる。

(78) seit drei Jahren in dieser Stadt wohnen

述語形容詞とその目的語の場合、動詞と統語的に密接な関係にあるのは述語形容詞である。述語内容語は、伝統文法ではコプラ動詞と共に述語を形成する。また依存関係文法では、現在一般に、述語内容語はコプラ動詞の補足成分とされる (Dudenband 4.—Die Grammatik (2009) S. 779、Engel (1988) S. 187)。これに対して、形容詞の前置詞格目的語は、形容詞の(随意的)補足成分であり、「第2級の前置詞格目的語」(Präpositionalobjekt zweiten Grades; Dudenband 4.—Die Grammatik (1984) S. 626)とも呼ばれる。以下の不定詞句の例(79)では、動詞 *sein* が述語形容詞 *verantwortlich* を支配し、*verantwortlich* が前置詞格目的語 *für den Einkauf* を支配しており、コプラ動詞の補足成分である述語内容語は動詞の直前の位置を、形容詞の前置詞格目的語は形容詞の直前の位置を占める。

(79) für den Einkauf verantwortlich sein

これは、付加語においても同様である。以下の例(80)では、被規定語である名詞 *Mitarbeiter* の直前に規定語である形容詞 *verantwortliche* が生起しなくてはならず、形容詞の前置詞格目的語 *für den Einkauf* は形容詞の前に現れる。

(80) der für den Einkauf verantwortliche Mitarbeiter

なお、(79)において、前置詞格目的語を支配するのは、述語形容詞ではなく、述語形容詞＋コプラ動詞 (*verantwortlich sein*) であるという可能性は、付加語の例 (80) でコプラ動詞が生起していないにもかかわらず、前置詞格目的語が用いられていることから、排除される。

以上、統語関係上の密接度という観点からも、形容詞とその前置詞格目的語の基本語順は、[前置詞格目的語—形容詞] であることが支持される。

最後に、枠構造との関連で考察する。枠構造の1つである動詞枠は定動詞とそれ以外の述語部分から構成されるが、この動詞枠の1つがコプラ動詞と述語内容語と考えられている (川島 (編) (1994) S. 819)。したがって、以下の例 (81) において、*ist* が左文枠に、*böse* が右文枠に現われ、枠構造を形成している。

(81) Sie *ist* dir ganz *böse*. (ebd.)

Helbig / Buscha (2001) でも、コプラ動詞と共に用いられた述語名詞・述語形容詞は、枠形成機能を有していると述べられており、以下の例が挙げられている (Helbig / Buscha (2001) S. 476)。

(82) Sie *ist* wahrscheinlich schon seit einiger Zeit nicht ganz *gesund*.

一方、枠構造に関して、文枠を占めるのは動詞要素のみであるという見解もある。たとえば、Wöllstein-Leisten / Heilmann / Stepan / Vikner (1997) では、右文枠に生起するのは、不定詞、定動詞、過去分詞、分離前綴りなどであり、述語形容詞は挙げられていない (Wöllstein-Leisten / Heilmann / Stepan / Vikner (1997) S. 55)。この見解では、述語内容語は中域の最右端に生起すると考えられる。

枠構造に関しては、見解の違いによって、述語内容語の生起する位置が右文枠または中域の最右端となるが、いずれにせよ、形容詞の前置詞格目的語は形容詞よりも前に現れる点に相違はない。したがって、枠構造という観点からも、形容詞とその前置詞格目的語の基本語順は、[前置詞格目的語—形容詞] であることがわかる⁶⁾。

4. まとめ

本論文では、形容詞とその前置詞格目的語の語順には、[前置詞格目的語—形容詞] および [形容詞—前置詞格目的語] の2つの語順が可能とされているが、このうちの一方が基本語順であり、もう一方は基本語順から作られた実現形であると考え、形容詞と前置詞格目的語の基本語順について考察してきた。その際、まず主文と副文の定動詞の位置に関して言及し、より一貫性があり、より簡潔な主要部後続型の語順を基本語順とした。この基本語順の考えを、形容詞と前置詞格目的語にも適用し、分析・考察した結果、基本語順は [前置詞格目的語—形容詞] であるという結論が得られた。さらにこの基本語順を、語順に関する他の規則・要因などを援用して考察を進め、それが妥当なものであることも判明した。

なお、上記の基本語順から [形容詞—前置詞格目的語]、たとえば *Das Brot ist frei von Konservierungsmitteln.* (Langenscheidt (2010) S. 424) という語順が作られる要因に関しては取り上げなかったが、この点に関して言及しておく。まず2.3の表から、形容詞の音節数が語順に影響を及ぼしている可能性がある。すなわち、本論文で考察の対象とした形容詞と前置詞格目的語に関して、実現形の語順が100% [前置詞格目的語—形容詞] であるものは複音節の形容詞 (*abhängig, angewiesen, aufmerksam, behilflich, einverstanden, fähig, interessiert, verliebt, zufrieden, zuständig*) であり、単音節の形容詞はなかった。一方、実現形が100% [形容詞—前置詞格目的語] の語順であるものは、1音節や2音節の形容詞 (*scharf, schuld; böse, durstig, hungrig, neidisch, traurig*) であり、例外は *eifersüchtig* (4音節) の1語のみであった。また、上記以外の1音節の形容詞 (*arm, frei, froh, reich, stolz*) も、[形容詞—前置詞格目的語] の語順になる傾向が高かった。この点に関しては、語順の形態的要因 [短い文肢—長く複雑な文肢] (代名詞—完全名詞句、名詞句—前置詞句など) が関与しているとも考えられる。すなわち上記の例では、*frei* が単音節の短い形容詞である一方、前置詞句は長く、また名詞句と前置詞から形成された複雑な文肢であることが、実現形で上記のような語順になっている要因と考えられる。もう一点、形容詞の形態に関して、実現形が [前置詞格目的語—形容詞] の語順になる場合、その形容詞は、動詞の過去分詞と同形 (*angewiesen, beliebt, erstaunt, interessiert, verliebt*) であることが多いということが言える。こ

の場合は、枠構造からの説明が可能である。もちろん、語順に関しては、新旧情報や焦点など伝達の要因も関与するが、形容詞の音節数・語形態も語順の決定に重要な役割を果たしていると考えられる。この点に関しては、改めて考察していきたい。

注

- 1) / (スラッシュ) はその前後の要素が交換可能であることを表す。すなわち、*ärgerlich* は前置詞格目的語として *auf* と 4 格の名詞句または *über* と 4 格の名詞句を支配する。
- 2) *behilflich* は前置詞格目的語のほかに、3 格目的語も支配する。
- 3) *dankbar* は前置詞格目的語のほかに、3 格目的語も支配する。
- 4) *von jmdm. / etw. abhängig sein* のように、前置詞句内の名詞句が具体的な名詞・代名詞などではなく *jemand* や *etwas* の用例は除外している。*von Drogen, von Tabletten abhängig sein* (Dudenband 2.—Das Stilwörterbuch (2010) S. 32) など、形容詞が支配している前置詞句内の名詞などが複数記載されている用例は、複数の用例 (*von Drogen abhängig sein* および *von Tabletten abhängig sein*) として扱っている。同一の用例でも異なる辞書で記載されている場合、また同一の辞書でも異なる項目・ページで記載されている場合は、複数の用例としている。辞書ではしばしば見出し語が頭文字などで表記されているが、これは全書している。また完全な文でも、文頭の語が小文字で表記されている場合は、大文字で記載するなど、文としての表記に従っている。
- 5) 表中の「前目」は前置詞格目的語、「形」は形容詞、「主述」は主語の述語内容語、「目述」は目的語の述語内容語を表す。また、「他」は *verantwortlich* を除くと、すべて統語機能が不明なものである。
- 6) なお、枠構造に関連して、Helbig / Buscha (2001) では、*Er ist schuld an dem Unfall.* において、*an dem Unfall* は枠外配置されているとしている (Helbig / Buscha (2001) S. 488)。しかし、これは事実と異なる。なぜならば、この文を、*dass er schuld an dem Unfall ist* と副文にしたとき、右文枠を占めるのが定動詞 *ist* であるからである。この点からも、述語内容語は右文枠を占めるのではなく、中域の最右端の位置を占めると考えるべきであろう。

一次文献

Der kleine Wahrig. Wörterbuch der deutschen Sprache (2007). Hrsg. von Renate Wahrig-Burfeind. Gütersloh, München.

- Duden. Deutsch als Fremdsprache Standardwörterbuch (2010). Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- Dudenband 2.—Das Stilwörterbuch (2010). Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- Langenscheidt. Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache (2010). Hrsg. von Dieter Götz, Günther Haensch, Hans Wellmann. Berlin, München, Wien, Zürich, New York.

二次文献

- Dudenband 4.—Die Grammatik (1984). Hrsg. von Günther Drosdowski. 4. Aufl. Mannheim.
- Dudenband 4.—Die Grammatik (2005). Hrsg. von der Dudenredaktion. 7. Aufl. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich.
- Dudenband 4.—Die Grammatik (2009). Hrsg. von der Dudenredaktion. 8. Aufl. Mannheim, Zürich.
- Dürscheid, Christa (2000): Syntax. Grundlagen und Theorien. Wiesbaden.
- Eisenberg, Peter (2004): Grundriß der deutschen Grammatik. Band. 2: Satz. Stuttgart, Weimar.
- Engel, Ulrich (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.
- (1994): Syntax der deutschen Gegenwartssprache. 3. Aufl. Berlin.
- Engel, Ulrich / Helmut Schumacher (1978): Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 2. Aufl. Tübingen.
- Engel, Ulrich / Meliss, Meike (Hrsg.) (2004): Dependenz, Valenz und Wortstellung. München.
- Eroms, Hans-Werner (2000): Syntax der deutschen Grammatik. Berlin, New York.
- Flämig, Walter (1991): Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Berlin.
- Flämig, Walter et al. (1981): Grundzüge einer deutschen Grammatik. Berlin.
- 浜崎 長寿 / 橋本 政義 (2004) : 名詞・代名詞・形容詞. 大学書林.
- Helbig, Gerhard / Joachim Buscha (2001): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin, München.
- Helbig, Gerhard / Wolfgang Schenkel (1975): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. Leipzig.
- Hentschel, Elke / Harald Weydt (1994): Handbuch der deutschen Grammatik. 2. Aufl. Berlin, New York.
- (2003): Handbuch der deutschen Grammatik. 3. Aufl. Berlin, New York.

- 人見 明宏 (2007) : 依存関係文法における相関詞 es + 文枝文について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第39号 (言語・文学編)、S. 325-341.
- (2008) : 「代名詞的副詞」の統語範疇について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第40号 (言語・文学編)、S. 303-322.
- (2009) : da(r) + 前置詞と文枝文との「相関」について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第41号 (言語・文学編)、S. 195-212.
- (2010) : 形容詞 zufrieden、stolz と前置詞格目的語の語順について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第42号 (言語・文学編)、S. 209-225.
- (2012) : 述語内容語の付加語を伴った文の統語構造について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第44号 (言語・文学編)、S. 185-206.
- (2014) : 述語形容詞を伴った結果構文の統語構造について. In : 愛知県立大学外国語学部紀要第46号 (言語・文学編)、S. 285-305.
- 川島 淳夫 (編) (1994) : ドイツ言語学辞典. 紀伊國屋書店.
- Lee, Sun-Muk (1994): Untersuchung zur Valenz es Adjektivs in der deutschen Gegenwartssprache. Die morphosyntaktische und logisch-semantiche Bestimmung der Ergänzungen zum Adjektiv. Frankfurt am Main, Berlin, Bern, New York, Paris, Wien.
- 中山 豊 (2011) : 中級ドイツ文法—基礎から応用まで—. 白水社.
- Pittner, Karin / Judith Berman (2004): Deutsche Syntax. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.
- Schumacher, Helmut / Jacqueline Kubczak / Renate Schmidt / Vera de Ruiter (2004): VALBU—Valenzwörterbuch der deutschen Verben. Tübingen.
- Sommerfeldt, Karl-Ernst / Herbert Schreiber (1983): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Adjektive. Leipzig.
- Stănescu, Speranța (Hrsg.) (2004): Die Valenztheorie. Bestandsaufnahme und Perspektiven. Frankfurt am Main.
- Tarvainen, Kalevi (2000): Einführung in die Dependenzgrammatik. Tübingen.
- Tesnière, Lucien (1980): Grundzüge der strukturalen Syntax. Hrsg. u. übers. von Ulrich Engel. Stuttgart.
- Weber, Heinz Josef (1992): Dependenzgrammatik. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.
- Wöllstein-Leisten, Angelika / Axel Heilmann / Peter Stepan / Sten Vikner (1997): Deutsche Satzstruktur. Grundlagen der syntaktischen Analyse. Tübingen.
- 在間 進 (1992) : 詳解ドイツ語文法. 大修館書店.
- Zifonun, Gisela / Ludger Hoffmann / Bruno Strecker et al. (1997): Grammatik der deutschen Sprache. 3 Bde. Berlin, New York.